

伝統の構造と村の変容

龍谷大学教授 口羽益生

1 報告の狙い

東北タイのドンデーン村は、1964～5年に、水野浩一によって初めて社会学的に調査された村である。その村で、1981年と1983年に、総合的な観点から学際的に追跡調査が行なわれたが、この報告はその成果の一部である。

水野がドンデーン村の社会生活の核となる構造の固有な特徴を理解する鍵として呈示した概念に「屋敷地共住集団」がある。この村では、親・娘世帯が文字通り共同耕作し、収穫米を共同消費する近親世帯間の共同慣行がみられる。その共同関係は、村では「共働・共食（ヘットナムカン・キンナムカン）」の関係と呼ばれている。この関係にある二、三の近親世帯を、水野は「屋敷地共住集団」と呼ぶ。その名称は、厳密には、誤解を招く点もあるが、その共同の構造は、確かに村人の日常生活を理解する核を構成している。

水野は、このような近親関係の中核となる家族生活の特質を、次のようにとらえる。タイ家族では、個人としての家族成員の、集団としての家族からの独立性が相対的に強く、その意味で、タイ家族は二者関係の累積体として見られる。その関係には、一方において、成員間の「損得相互依存の感覚」と、他方、「相互に相手を思う気持を価値ありとする間柄の論理」が、その特性としてみられる。この間柄の論理の支柱となっているのがタイの仏教論理である。

水野のこの説明の意図は、タイ家族には、西欧における個人本位性でもなく、日本における集団本位性でもない間柄尊重の価値があることの指摘にあったように思われる。確かに東南アジアのかなりの地域の家族生活を日本の場合と比較して感ずることは、個人の相対的独立性の強さである。だか、ドンデーン村における「共働・共食」慣行をみると、家族における献身的な共同感情の強さをも感じ取ることができる。水野は、近親世帯間のこの緊密な共同への動機づけの根拠を、タイの仏教論理であるとしたが、それは、村人のレベルでは、どのように解釈され、村人のどのような宗教的信念 (belief) によるものであるかについては、何も触れていない。

この報告では、ドンデーン村の社会的核を構成すると考えられる近親間共同が、どのようなものであり、それが、村人のどのような宗教的信念によって方向づけら

れ、この共同の構造が、急速に変動しつつある東北タイのドンデーン村において、どのような意味を持っているのかについて説明したい。

2 近親の共同構造

ドンデーン村における親子世帯間の水田耕作を中心とした日常的な共同関係は、近親の間、特に親・娘世帯間で相互の必要が感じられる場合に、「共働・共食」と表現される共同規範によって強調される。実の親子関係における日常的な互酬関係は当然のこととされているが、共同しなければ、家族生活の機能が十分に果たされない時に、あるいは共同が望ましいと考えられる時に、それは強調される。この事実は、一つには、家族のあり方と関連している。

ドンデーンでは、血縁・血統はスムと表現される。血縁を同じくする間柄は、スムディオカンと呼ばれ、それは、狭義には、夫婦、親子、きょうだい、祖父母・孫の関係を中心とする家族を意味し、広義には、おば、おじ、甥・姪、いとこ、ふたいとこまでおよぶ親族関係を意味する。一つの家屋に共住する近親、すなわち、世帯は、コーブヒエンまたはヒエンディオカンと呼ばれる。

世帯の家族構成の特徴は、基本的には、夫婦と未婚の子女からなる核家族（62.5%）であり、それに一組の既婚の子女の家族が同居するステム家族（26.1%）である。同居する既婚子女の家族は、妻方居住の支配的な慣行のため、娘家族の同居が多いが、原則的には、世帯の家族構成は核家族が望まれている。したがって近親が別居していても、共同が必要な時には、別居近親世帯が、まるで一世帯であるかのような共同が行なわれる。

この近親間の特徴的な共同関係は、村人の標準的な人の一生と家族周期をたどてみると、一層よく理解できる。男子は、21歳になるまでに得度をし、たとえ短期間（通常3カ月）であっても見習い僧となることが期待され、それによって男子は一人前になるといわれる。平均初婚年齢は男子22.9歳、女子20.7歳である。

初子の結婚は父親が45歳ころである。妻方居住慣行のため、息子は婿入りするが、娘夫婦は最初、妻方の家族と同居する。娘夫婦の独立性は尊重されるが、二人は妻方家族の主要な労働力となる。娘夫婦に子供ができ、経済的に多少ゆとりができるころ、あるいは次女の結婚のとき、長女夫婦は近くの独立家屋に移り住む。

その後も稲作を中心にした親子間の共同が行なわれるが、このような近親世帯間の共同関係が「共働・共食」と呼ばれる。その共同関係は、娘夫婦が経済的に独立するまで続く。

末娘の結婚は父親が60歳前後になるころである。このころから親は、子供夫婦の

世話になる段階に入る。多くの村人は、老後に末娘との同居を望む。老親は主要な稲作の作業を末娘夫婦に任せ、農繁期の野菜作を手伝い、孫の世話をし、寺院での行事に熱心になる。村の中でのほとんどのステム家族の構成は、娘家族と親との一時的同居か、末娘家族の同居によって構成される。

「共働・共食」の関係にある世帯数は、1981年では、59世帯（30組の共同関係を構成し、重複する組もある）あり、それは全世帯176の33.5%に当る。その構成内容のほとんどは、親・娘関係であり、6事例のみ親・息子、おば・甥、姉・妹、姉・弟の関係である。たとえ当該世帯が別居していても、共働共食関係にある近親世帯は、まるで一世帯であるように日常的に共同する。稲作の農繁期には、この共同関係にない他の子供の世帯、特に娘が、自発的に親世帯の田植え等を手伝うので、親と娘世帯間の親密度は一般的に非常に高い。

このような近親世帯間の共働共食関係の主たる機能は、全体的にみれば、親が子世帯の自立を扶助することにあるが、親が老後に子供の助力を必要とする時や他の近親が助力を必要とする時にも、共働共食の関係がみられる。

この親娘世帯間の緊密な関係は、財の相続のあり方と関連している。一般的には、息子は自立することが期待され、娘は親の庇護を受けるものという考え方がある。したがって、結婚の時、息子には水牛や金銭の動産が、娘には農地が与えられる。事実、この傾向は強い。しかし、親の子に対する態度は基本的には公平である。過半数の村人は、財は親子間で均等配分すべきであるという。親の取り分は、親の老後を世話した子が相続するのが当然であるとされている。妻方居住制、娘中心の相続制により、親娘世帯間の日常的共同が緊密になるのは自然であろう。

確かに、農地を相続する娘家族が、親と自発的に共同するという点においては、親娘間の互酬関係は一見バランスが取れているように見られるが、このような共同性は、村人の固有の宗教的信念によっても支えられている。

3 近親共同の宗教的背景

ドンデーン村の財の相続方法は、きわめて合理的である。農地の相続は、妻方居住慣行のために、娘中心に行なわれるが、基本的には均等分相続の意識があり、農地を必要とする息子にも農地は配分される。しかし、親の老後の世話をした子には、親の取り分や家・屋敷地が与えられ、他のきょうだいの倍以上の財を相続する。

この親の取り分に当たる財は、古い言葉で、両親のための「供養料」と表現される。その相続財は、親の老後の世話に対する代償でもあるが、同時に親の来世でのよき転生のための文字通りの供養のための財でもある。その相続者は、親の供養儀礼を近親の間で発起する義務があるとされている。

村人に重要な宗教儀礼をランクさせると、タイ仏教儀礼のうち、最も重要とされるジャータカ誕生祭が一位にランクされるが、カチン儀礼とカオサーク儀礼と呼ばれる物故した近親、特に親への供養儀礼が重要なものとされる。また宗教的行為の内で、重要とされるものは、「カチン儀礼にて供物をなすこと」、「布薩堂建立のための寄付」、「息子を得度させること」が上位にランクされる。

村人は、功德（ブン）を積むことによって、よき来世への転生を望む。親のよき来世のために、供養儀礼が重要であるとされるのであるが、功德は、個人のためだけではなく、それを他者に転送（回向）することも可能である。したがって、親、特に母親は、息子自身のためのみならず、自らのために、息子の得度を強く望む。息子の得度は、一人前の社会人になるためだけではなく、得度によって得る功德を親の来世のために親に回向する報恩の意味があるからである。またほとんどの重要な儀礼において、近親は、功德を積むことに共同し、その功德を分ち合うことが強調される。

息子が得度をすれば、親、特に自ら僧となって功德が積めない母親は歓喜する。しかし、それは母親のよき来世を必ずしも保証するものではない。60歳を過ぎ、娘たちが世話をしてくれるようになると、村人は、寺院行事に熱心になる。自らのための功德と、それを亡くなった近親に回向するためであるが、そのように子供たちが供養儀礼をしてくれることを望む親の願いが、あの「供養料」と呼ばれる相続財に込められている。

功德は、自分のためのみならず、世話になった近親への回向のために、それは近親、広くは同朋の間で分ち合うものであるというドンデーンの村人に固有の世界観的秩序観が、村人の近親間における献身的共同感情や勤勉の美德を方向づけている枠組みを提供しているように思われる。このような村人の共同の構造が、急速に変動しつつある村の生活にどのような意味を持っているかについても報告したい。